

## 季節の技術

# 冬も産卵倍増 冬期養鶏の坎どころ

岩本敏雄

鶏は元来、寒さには強いといわれているが、現在のように鶏の管理様式がケージ飼育に変わって来ると当然のことながら冬期間は従来の平飼い鶏舎以上に防寒に注意を払うことが大切です。

一般的に、ケージ鶏舎は四方が開放的であり、同一場所にある平飼い鶏舎と冬期の最低気温を比較してみると、相当に防寒処置をしても、摂氏2～4度は低くなるようです。

最低気温が摂氏3～4度くらい迄では、他の悪条件が重ならない限り割合産卵低下をみないのが普通ですが、氷点下3～4度が数日続くと産卵低下が目立つようになります。

以下、冬期間の飼養管理の要点を記してみます。

### 1、防 寒

鶏舎周囲をビニールで被うのが比較的簡単ですが、その被う程度は鶏の収容密度を考慮して、北、西に面した部分は冬期間中固定して取り付けてもよいが南、東面は状況によりいつでも取りはずせるようにカーテン式か、その他簡単な取り付けにしておくこと、特にビニールで昼夜一日中被っておくと天気の良い日中は鶏舎内が摂氏20度以上に上昇し鶏舎内がムツとするくらいになりますが、夜間の最低気温は零下にさがり、日較差が大きくなり（日格差は摂氏10度以内にするのがよい）換気不良とともに、鶏に悪影響がでてきます。

### 2、点 灯

点灯の重要性は申すまでもありませんが、ケージ飼育で同一鶏舎内に日令的に異なる鶏がいる場合、点灯時間をあまり長くすると若雌の産卵が翌春早く低下するところになります。従って点灯時間の標準は13～14時間位にするのがよい。

電源の強さはケージの通路3～4米毎に40W 一個が適当です。特に積重ね式ケージなどでは格段に光

線がゆきわたるよう位置に注意します。又、電灯には傘を設け、点灯は規則正しく行います。

### 3、日常の管理

前記の防寒と点灯管理が合理的におこなわれておれば、冬期間でも相当の高産卵が維持できますが、厳寒期には飼料の喰べ込みも落ち易いので穀類のやや多いエネルギーの不足しない飼料を与えるとともに、飼料中にビタミンA、D剤の添加、ニンニク（1羽1日あて約1g程度）の給与も効果があります。

厳寒期には夜間に給水器の水が凍ることもありますからこのような時期には夕方給水器の水を捨てておくことも大切で、氷片を鶏がたべると消化障碍（とくにそ嚢カタル）をおこし易くなります。

### 4、発生し易い病気

#### （1）伝染性鼻カタル

これは普通、ジフテリアとカループといわれているもので、秋から冬にかけて気候の変り目に多く発生します。

症状は、眼や鼻、口、呼吸器が侵され涙や鼻汁など出し、更に病気が進行すると顔面がはれて、チーズ状のウミが上アゴや眼にたまるようになります。

治療法としては、サルファ剤、ペニシリン、ストレプトマイシン等で治療するのがよいが、病気の進行したものは治りにくく、長く休産して換羽するものもあります。

予防としては、換気をよくして、とくに、隙間風などを防ぎ、防寒につとめることが大切です。

#### （2）内蔵型白血病（リンパ腫症）

俗に“こもばれ”といわれるように肝臓に変化の現れ易い伝染病ですが、血液病ですから肝臓に限らず殆んどあらゆる臓器や皮膚にまで病変をおこします。

とくに冬期に発生する病気とはいえませんが、ふ

## 岡山畜産便り 1963.12

化後4～5ヵ月令から発生しはじめ、6～8月令ごろが最多発期であり、300日令位から発生が少なくなり、2才鶏以上の老鶏では発生は極度に少なくなります。

白血病の治療法は、現在のところ皆無の状態、発生したら急速に体重の減少がみられますから、発見次第早期に淘汰するのが得策です。

症状は緑色下痢便（初期のみで斃死直前には普通便になる）が最初にみられ、その色は、濃緑色→緑色→緑褐色→褐色のように変化することが多く、冠の脱力、食欲、活力の減退産卵の異常などが現れれば内蔵型白血病が疑われ、総排泄口から指を入れて、直腸末端の上部フアブリシアス嚢が腫大しているのを触診できれば診断はなお確実です。

（岡山県養鶏試験場技師）